

前回、見所の小雀(8)を書いたのは今年の12月31日でした。私はその年は48番の能を観たと、やや得意気？に書いています。実際それまでの5、6年間は毎年50番位観るほど能に夢中であり、自分自身の謡や仕舞、舞囃子の稽古の他に、あちこち能楽講座にも参加し、私の生活の8割までが能楽にとっぷりハマっていました。自分自身の稽古歴はわずか14年と短く、人様にエラそうなことを書いたりする分際でないことを十分承知の上でしたが、これほど能楽が好きなんだからお許しもあるのではと厚かましく、こうしてエッセイを書かせて頂きました。本当に私にとって能は知れば知るほど面白く、すればするほど奥が深く、観れば観るほどまた観たくなる魅力があります。

しかし今年は残念ながら「求塚」「土蜘蛛」「砧」「安宅」「無明の井」「通小町」「楊貴妃」「玄象」「安達原」「乱」の10番を、それもかなり無理を覚悟で観ました。他にチケットを手にしながらか観に行くのを諦めた曲も何曲かあります。これは1月28日の朝、私を襲った「突発性難聴」によって、右耳が不調になり特に大きな響きのある音を受け付けられなくなって、観能がままならなくなってしまったからです。

発症して4、5カ月の私の苦しみは相当なものでした。晩年を能三昧に過ごすことが私の夢でしたし、自分の謡も、もう少しステップアップ出来るかもしれないという希望を持っている時期で、それだけに落ち込み方がひどくて、鬱状態から抜けるのが大変でした。

こんな状況の中で「無名の井」を多田富雄さん三回忌追悼能公演として国立能楽堂(4月21日)で観ました。これは多田さんの新作能・第一作目で、すでに何度か上演もされ、当時話題になった「臓器移植」がテーマ。科学より哲学の面から深く考えさせられる内容です。こんな現代的で難しい内容を能という決まりごとの多い中によく収められて、さすが能楽に精通している方ならこそと感心しました。

多田さんは免疫学者として輝かしい業績を残されているばかりでなく、能楽に造詣が深く、新作能も8作あり、能に関する著作も多いことは周知の通りです。

実は私は著書「免疫の意味論」の時から愛読者で、後から能楽でも有名な人なのだとなり、能について書かれた本はほとんど持っていて、ある意味バイブルのように読み、尊敬していました。約11年前金沢で脳梗塞になられ、半身麻痺だけでなく言葉も話せなくなったその経緯は著書「寡黙なる巨人」に詳しく書かれています。私は多田さんが病後、奥様と一緒に車椅子で国立能楽堂に観能に来られている姿を何度もお見かけしましたし、縁あって亡くなられた後、「偲ぶ会」にも伺い奥様とも親しくお話する機会もありました。その時は東京会館だったと思いますが、浅見真州さんや、梅若玄祥さんの舞囃子もあり、能関係者も多数出席されていました。

以上のような訳で私は多田さんがその後も次々と病魔に襲われ、その苛酷な状況の中で本を書き、新作能もいくつか作られたことに、大変同情もし畏敬の念を持っていました。しかし今年私自身の発病後にもう一度「寡黙なる巨人」を読み直して心から驚きました。ある意味雷に打たれたような衝撃でした。それは多田さんが脳梗塞になられたのが、私と同じ67歳という現実感や研究も能楽もノリに乗り、充実感と幸福感の絶頂だったと述懐されていることです。私の様な凡婦と比べると比べるなど畏れ多いのですが、私も奈落の底に落ちる感覚や、その中でどの様に心を立て直し、活路を見出そうかと、もがいた経験によって、今までと全く違った受け止め方をしたからです。彼に比べたら私など疑似体験の初歩に過ぎず軽症ですが、玄人はだしと言われるほど小鼓の名手だった多田さんが、夢の中でさえ打つことが叶わぬことに涙する姿は、大なり小なりといえ私にも共通する悲しみです。

それでも私はこれから、例え耳の回復が望めなくても、好きな道を諦めず、出来る範囲で続けていこうとするのは、多田さんという先達から大きな勇気を与えられたからです。加えて来年からは新しく俳句を始めようと思います。今年11月なんとか観世能楽堂で舞囃子を舞うことができた私に、同病経験者の児島和子さんが観て送って下さった句『足袋先に込めし気魄やシテの舞』のエールに感謝。尾崎純子記